

100歳総研 渋沢栄一研究会 第三期

「渋沢栄一から始める研究会」

(原案) 濱名 均 2023年3月13日

・二年間の研究会/読書会で＜辿り着いた（6+2）つの視点＞

①栄一のパリ万博、渡欧体験から読み解く視点

- ・帰国後の国造りの構想をこの渡欧体験で学び確立させた視点
- ・女子教育、養育院などの福祉政策などの視点

②栄一の開拓事業と今日的要請としての食糧自給体制への視点

- ・「十勝清水への開拓」研究。さらに今日的な日本の食糧問題への視点を考える。

▶ ③栄一が憂いた明治政府の教育方針・・論語と算盤「教育と情誼」から、・・・国家100年の計は教育にありという視点

・「あいつも俺も、同じ人間じゃないか。あいつと同じ教育を受けた以上、あいつがやれることくらい俺にもできるさ」という風潮を栄一は憂いていた。

「明治時代」の光と陰から大正・昭和そして現代を考える視点

・昔は読む書籍がどれも自分の心を磨くことを説いていた。更に磨いたら、家族をまとめ、国をまとめ、天下を安定させる役割を担うという、人の踏むべき道の意味を教えたものだった（P192から）（千崎）

▶ ④栄一を世に出した、伯樂であった「平岡円四郎」を探せ！の視点

・「千里の馬は常に有れども、伯樂は常に有らず」（訳文：世間に馬の良し悪しをよく見抜く人がいてこそ、千里も走る名馬というものがありうるのである。名馬はいつでもいるけれど、それを見抜く人はいつもいるとは限らない）

・渋沢栄一を見出した平岡円四郎。坂本龍馬を見出した勝海舟。西郷隆盛を見出した島津斉彬など。

▶ **⑤幕末の日本を平和裏に「勢力交代」を成した徳川慶喜、再考の視点**

- ・「将の将たる器（うつわ）としての徳川慶喜を考える」
- ・「徳川慶喜の大阪城からの逃避の謎を考える」
- ・経営の要（かなめ）は、リーダーでありリーダーシップである。そのツールとして企業ガバナンスがある。その逆ではないという視点

▶ **⑥栄一の徳川家康公への尊敬（論語・道徳心への高い評価）から現代では国際社会を理解する国際人として、宗教心醸成の必要性の視点**

- ・家康の旗印「厭離穢土欣求浄土」（おんりえどごんぐじょうど）など、最近は宗教に興味を持つ（藤村）、この旗印が天下を取り治めたという視点。
- ・徳川家康をテーマにした読書会の際の共通テキストとして、まだ未読ではあるが「徳川家康という人」（河出新書935円）（本郷和人著）を考えています。新書版なので話題を取り上げやすいと思います。

「渋沢栄一から始める研究会」

⑦「新しい資本主義」の哲学を考えて実現することの視点

- ▶ <スタート>・渋沢栄一は渡欧（1867年～68年）当時のサン＝シモン主義（友愛社会）やロバート＝オーウエンの空想的社会主義（理想主義）などの影響を受けて、明治の日本経済を主導した。**それらの西洋の思想は一種の社会主義的思想（平等主義）を取り入れた資本主義であった。**ここが日本資本主義のスタートであったと一応評価する。
- ▶ ・「渋沢栄一から始める研究会」の視点は、栄一研究を踏まえて現代において「新しい資本主義」の哲学を成し実現することである。
 - 1、近年の我が国の「貧富の格差」の広がりはどう考えるか。
世界各国の経済構造を「貧富の差」で見るとどうゆう風景か？
 - 2、「**自然環境を含めた**共生社会の実現」を目指す場合の**哲学は何か。**
 - 3、日本の高度経済成長＝国家資本主義という視点の再考。

「渋沢栄一から始める研究会」

⑧ネクストステップとして、わが国の経済人及び社会の指導層への行動原理として、渋沢栄一が愛した「武士道精神」の必要性などが挙げられるという視点

- ▶ 新しい社会を形成していく際に求められる考え方、思想、哲学がある。江戸時代（あるいは幕末と明治維新誕生をも含めて）までにあった、民衆の中にまで浸透していた「武士道精神」という日本的な価値観を考えることは、本渋沢研究会の本流の一つでもある。
- ▶ 新しい社会の哲学と同時にそれを成し得ていくリーダー論とリーダー像がある。またリーダーを支えていくグループを研究する必要がある。
- ▶ それは民衆主義（ポピュリズム）なのかそれともエリート主義なのか我が国の近未来との関係性は？世界への通用度は？